

徳島市入田町入田瓦窯跡調査概報

徳島県那賀郡古屋岩蔭遺跡調査概報

昭和 44 年度

徳島県博物館建設記念学術奨励基金運用委員会



# 徳島市入田町内の御田瓦窯跡調査概報

立 天 花 羽 利 博  
羽 利 博 夫

## 1 序

入田瓦窯跡は、戦後まもない頃、土地所有者の阿部岩藏氏が赤土採取中偶然発見したものである。その後、昭和28年7月21日に、徳島県指定史跡になり木造の被覆施設をつくって、保護してきたが、これも永年のため腐朽し、また焼成部中央の孔穴からの崩壊もいちじるしくなってきたので、恒久的な保護施設工事を行なうこととなった。その基盤工事施工のため、それに先立ちこの調査を実施したものである。

調査期間 昭和43年1月4日～18日

調査員 立花 博・天羽利夫

調査協力者 岡本 垣（早大学生）小松島西高校郷土研究クラブ員

## 2 入田瓦窯跡の位置

入田瓦窯跡は、徳島市入田（にゅうた）町字内の御田（うちのみた）309番地にある。

第1図 徳島市入田町（川島5万分の1）



1 石井廃寺址 2 国分尼寺址（推） 3 国分寺址 4 旧常楽寺址（伝） 5 入田瓦窯址 6 入田須恵窯址

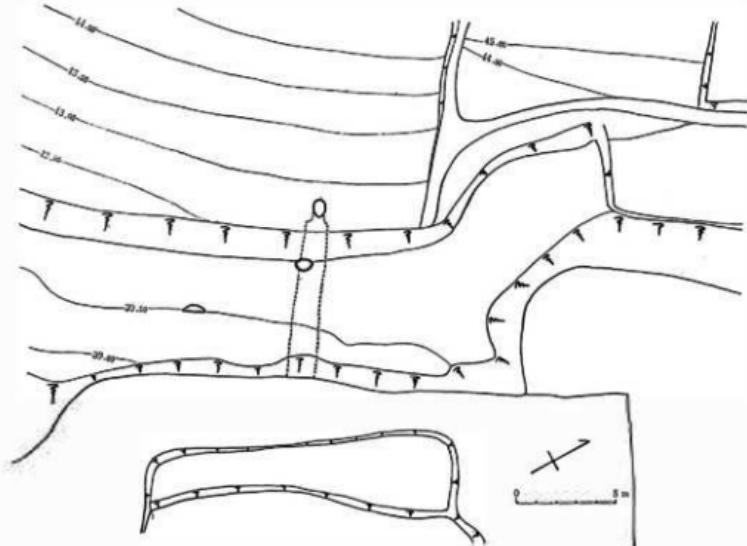
入田町内の御田は、徳島市の最西部で名西郡と境を接する所で、北の気延山（212.5メートル）と南の辰ヶ山（197.6メートル）にはさまれた狭隘な所である。（第1図）

この内の御田には、この瓦窯跡にあい対する南の辰ヶ山の麓にも、須恵窯と推定される窯跡が一基認められている。その他古墳も三基ほど見られる。またこの東に隣接する国府町には、国分寺址、國分尼寺址をはじめ、気延山を北西に越えた石井町にも石井庵寺址があり、その他この近辺は遺跡の多い地域である。

### 3 入田瓦窯跡の構造

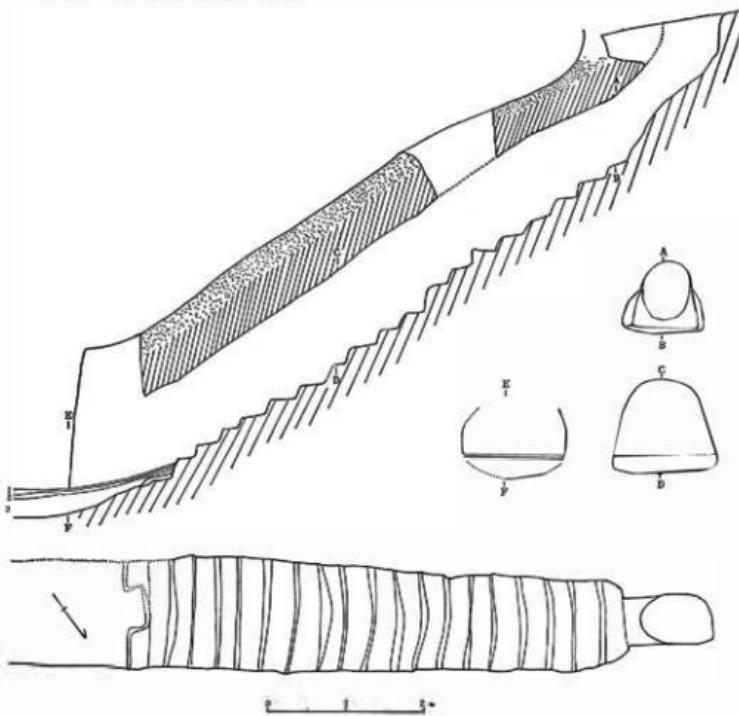
入田瓦窯は、気延山（212.5メートル）からしだいに高さを減じながら南にのびる小舌状丘陵地の東斜面に、主軸をN-54°-Wの方向にむけ、地表下約80センチメートル、焼成部の水平面と煙り出しの直立軸換点との比高約6メートルの高低差をもたせ、泥質片岩を穿ち、アーチ状に切り抜きトンネル状に構築した瓦窯である。（第2図）

第2図 瓦窯跡付近の地形



この瓦窯の焚口は、土取工事のため欠失しその痕跡はない。これに続く焼成部は僅かに残り、その残存部の上に約1.8メートル高さに石を積み重ね、崩土を防ぐ石垣を構築し窯口を閉塞している。この石垣の前面は僅かな平坦地を三段形成し、耕作地に利用されており、その付近にあったと推定される焚口、および窯に付随する灰原等の検出は不可能に近く、その規模、構造を窺知することさえできない。また燃焼部は一部残存するといえその全体の広さを確認することは困難である。煙り出しおよび焼成部は、天井の一部が穿孔されてはいるが、ほとんど完全に残り、その規模、構造などを知

第3図 瓦窯の規模と構造



るには充分なものであった。また、煙り出しおよび焼成部の天井の孔穴から土砂が流入し、焼成部のほとんどを埋めつくしていたため、窯底自体も損壊されることなく残存していた。(第3図)

第1図版 煙り出し



(1) 煙り出し (第1図版)

断面は、長径80センチメートル内外、短径65センチメートル内外の橢円形を呈し、焼成部の最奥の窯尻から約50°～60°の勾配をもちながら1.3メートルで直立に向き

をかえ檻かな長さで地表に達す。その壁面は地山を削り抜いたままであり、熱の作用をうけ赤褐色に変色している。

第2図版 焼成部



(2) 焼成部(第2図版)

焼成部の床は岩盤を掘り削り、19段の階段をつくっている。第一段は、当初の段が削平したためか平瓦と青灰色粘土で段状に補修されている。同様に、各段にも平瓦と粘土をもって踏面を整備したところも見うけられる。

天井および側壁は、「スサ」入りの粘土で上塗りをしてあり、ところどころに補修のあとがみられる。その厚さが3センチメートル

にもおよぶところもある。またその剥落も著しく、特に側壁面ではそれが顕著である。

最上段から最下段までの長さは7.56メートル、床面は約35°前後の傾斜をもつ。階段の各段の高さは、それぞれ異なるが踏面の実行は約30センチメートル内外では等しい。踏面から天井までの高さは

5段目 110センチメートル

10段目 118 "

15段目 110 "

最上段 85 "

であり、中央でやや高く、窯尻によるにしたがって低くなる。焼成部の各段の幅は

5段目 144センチメートル

10段目 136 "

15段目 122 "

最上段の前端 104 "

最奥壁 67 "

であり、幅は窯尻にいくにしたがい漸減し、煙り出し部との接点では極端に狭くなる。

(3) 燃焼部(第3、4図版)

焼成部との境には、階はみうけられなく、緩やかな斜面で焼成部と接している。側壁の岩盤が剥落

第3図版 燃焼部



第4図版 燃焼部と遺物出土状況



し、燃焼部の幅、高さおよび広さを確認することはできないが、幅が約1.4メートル内外、高さは1メートル内外であったろうと思われる。

床面は、三層からなり、それぞれの層に瓦片が含まれておらず、また第三層上部には、前述の流入土が累積し、その中に瓦片、土器類が検出された。

第1層は焼土の層からなる。この焼土の層が最終に使用された燃焼部の床面と考えられる。第2層は褐色土層からなり、第3層は搅乱された層であり、当初に使用された燃焼部を築きなおしたものと考えられる。焼成部の第一段もこの時の補修と思われる。

#### 4 出土 遺 物

遺物は、焼成部の階段の踏面に粘土とともに密着した状態で平瓦片が、焼成部下段と燃焼部に累積した流入土の中に瓦片、土器類が検出された。

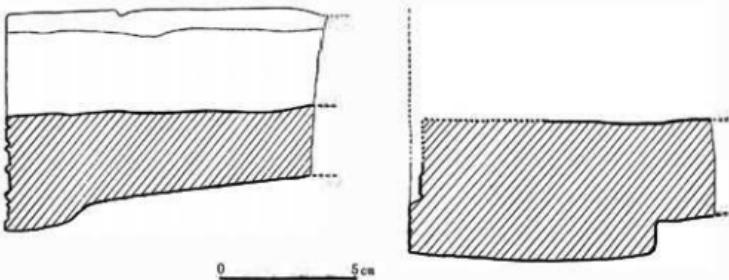
##### (1) 瓦 類

平瓦がほとんどであり、丸瓦はきわめて少ない。また、軒平瓦は三片あり、軒丸瓦は一片も検出されなかった。

###### ① 軒 平 瓦 (第4図、第5、6図版)

軒平瓦三片のうち、文様の鑑別できるものは二片で、そのうち一片は文様の完全なものであり、一片は、外区下帯の一部のみが判明できる残欠片で、他の一片は頭のみがみられるものである。文様の

第4図 軒 平 瓦 左 A類軒平瓦 右 B類軒平瓦



ある2片の軒平瓦の残片をA類、B類と仮に呼ぶこととする。

#### A類軒平瓦

判然としにくい頸があり、胎土には極少量の砂を含み、焼成は軟かい。瓦表面は叩き文を消し、滑らかに調整され、表面には布目痕を残し、模骨の形状をとどめた痕がみられる。

文様は、外区上帯に珠文、下帯に三条の線からなる山形文、内区は中心飾を中心左右均整唐草文がみられる。瓦の法量は次の表のとおりである。

A類軒平瓦の法量 cm

上弦弧	弧の深さ	下弦弧	厚さ	内区厚さ	外区上帯厚さ	外区下帯厚さ	文様のさ	長さ
28.3	4.4	34.3	4.2	1.6	1.2	1.4	0.1	—

第5図版 上 A類軒平瓦 下 B類軒平瓦



第6図版 軒平瓦拓影



B類軒平瓦

きわめて判然とした段頸をもち、胎土はA類軒平瓦と同様に少量の砂を含み、焼成も軟かい。頸は、前面に僅かに張り出し、その面に沈線で弧状の線がひかれている。文様は外区下帯は三条の線による山形文であり、内区は我欠部より均整唐草文様と思われる。外区上帯は欠損のため不明である。

A類軒平瓦と異なりB類軒平瓦は陰刻による施文であることは注目すべき点であろう。またこの軒平瓦の形成にあたり、その叩きしめが不充分であったためか、模骨に粘土をなでつけて成形したと考えられる接合面が屑となってみられる。これがこの瓦の剥離されやすい原因ともなっている。

## ② 平瓦（第7図版）

平瓦はありふれたものであるが、裏面に縄目の叩き文、葛目の叩き文を残したものと、叩き文をすり消し、平滑に磨いたものの三種類がみられ、側縁には、三回へら削りをなし丸味をもたせたものがみられる。（第7図版中段）

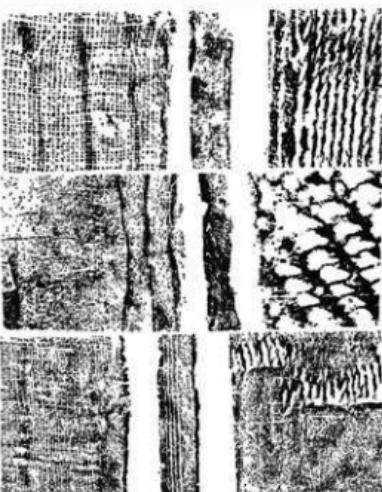
## ③ 丸瓦

平瓦の叩き文をすり消した技法と同じ技法によるもので、玉縁はないものである。

## （2）土器類（第5図）（第8図版）

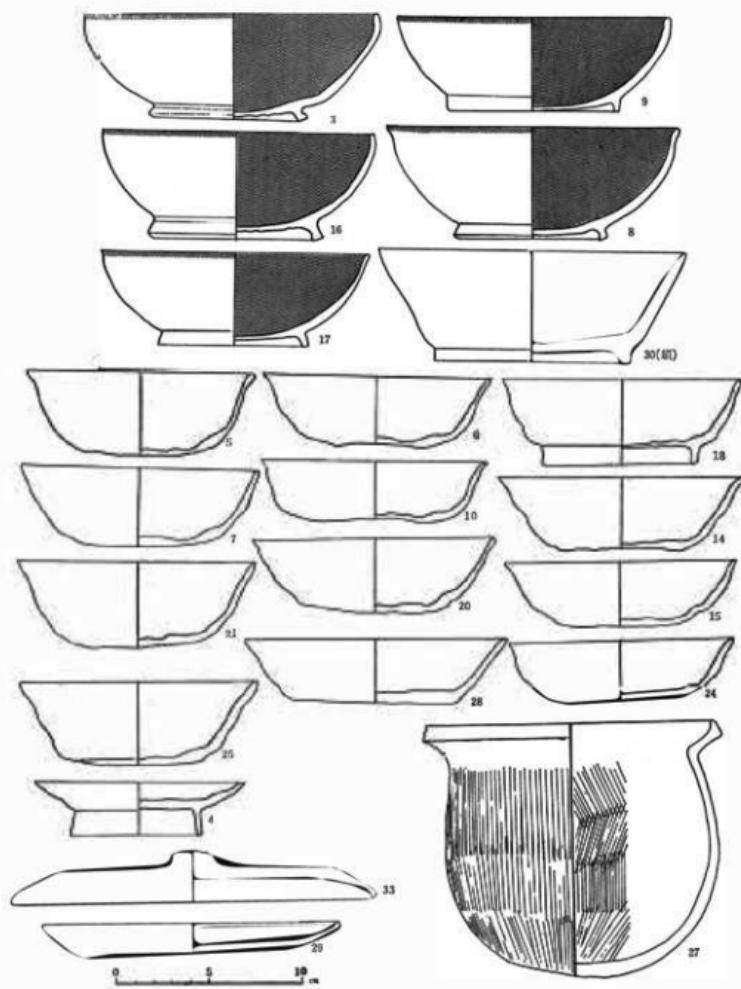
土器類は、燃焼部の第一層上の累積土の中に検出したもので、土師器が主であり、須恵器は一體化にすぎない。杯、碗、皿、壺の組み合わせとなっている。その法量、成形上の特色は次の表のとおりである。杯は口径14センチメートル以上、以下を碗、器高3センチメートル以下を皿とした。

## 第7図版 平瓦 拓影



名称	法 量	個数	土器 番号	口縁部	体 部	底 部	色 調	質	内 部	備 考
杯	高さ 5.3~6.0 口径 14.7~16.4	5	3 16 17 9 8	横なで まるみ	ゆるやかな 彎曲 へら磨き へら削り	へら削り 付高台	赤褐色	軟	黒いぶし へら磨き	黒色土器
杯	" 7.0 " 16.6	1	50	端部やや まるみ	外傾	高台	淡灰黒色	やや硬	横なで	須恵器
碗	" 4.6 " 15.0	1	18	端部まる み わずかな ふくらみ	ゆるやかな 彎曲 横なで	へら削り 高台	赤褐色	軟	"	土師器
皿	" 3.2~4.5 " 12.3~13.1	10	7 5 14 3	端部まる み	横なで	丸底 へら削り	"	"	"	"
皿	" 1.3~2.7 " 11.5~16.1	4	4 23 29 31	端部まる み 内側にま るくおわ る(29)	外傾なで (4) わずかに 外反(23, 31)	平底 へら削り 高台(4)	"	"	"	"
壺	" 14.0 " 15.5	1	27	端部断面 三角	わずかな ふくらみ 横目	丸底	黒褐色	" 砂粒を 多くふ くむ"	あらい御 目	"

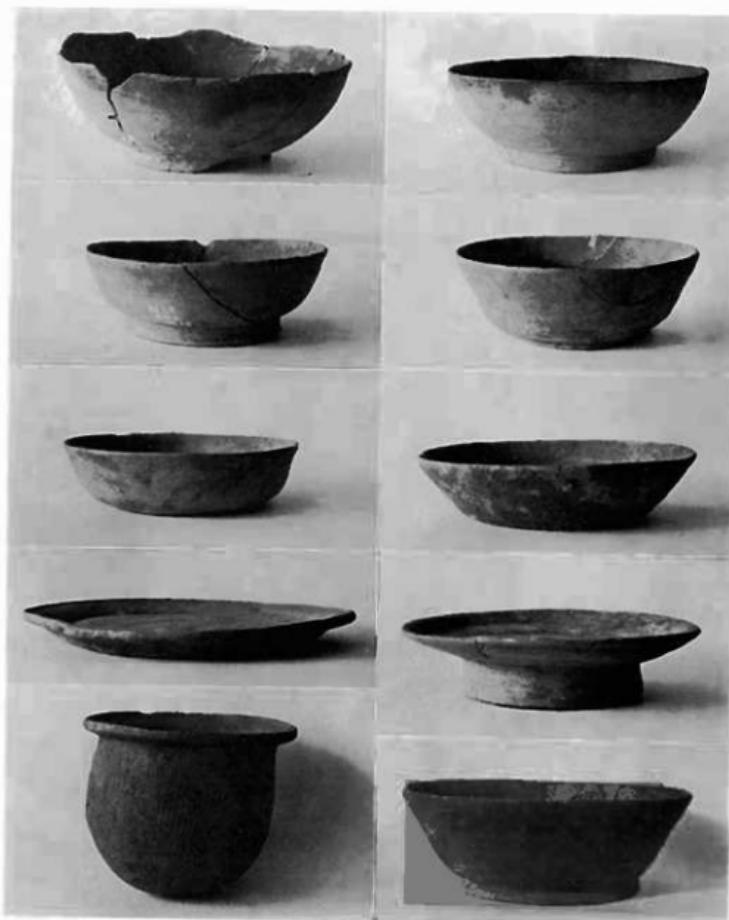
第5図 土器類 (3,9,8,16,17は黒色土器) (数字は土器整理番号を示す)



第8図版

左上より 16, 18, 11, 23, 2

右上より 9, 15, 10, 19, 30 (数字は土器整理番号)



### (3) その他の

この調査によって検出されたものではないが、土地所有者の阿部岩藏氏が発見したものに円面鏡がある。

(第6図)

### 5 考 察

入田瓦窯跡の調査概要是以上のことである。この調査に基づき入田瓦窯の性格を考えたいと思う。

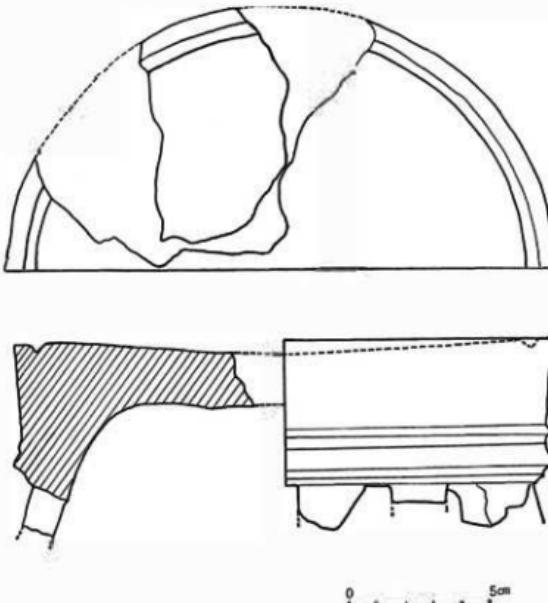
この瓦窯は、地下式の有段の登り窯であり、この規模は飛鳥寺瓦窯址にも比肩されるべきもので、構造においても類似したものである。県内には、いくつかの瓦窯跡が知られているが、  
そのほとんどは、痕跡をと  
止(1)  
どめるものか、または未調査のものである。

瓦窯跡としてその全てが明らかになったのは、これが県内唯一といつてもよい。

この瓦窯と有機的関係にあった瓦の供給先は、どこであったろうか。この手がかりになるのは、瓦の出土地であることはいうまでもない。この瓦窯で検出した二種類の軒平瓦の意匠の特色からその出土を県内に求めると「石井廃寺址」「旧常楽寺址(伝)」「国分尼寺址(伝)」の三ヶ所である。  
「石井廃寺」の金堂址等から出土したものとA類軒平瓦との比較において、一見きわめて類似し、文様形式は同式とみてよいが、それとは中心飾の上下が逆であり、したがって、中心飾から左右にのびる唐草文の反転方向が異なる。また細部においても多少の違いがみられ、同范とは考えられない。「旧常楽寺址(伝)」の出土瓦とも異なり、「国分尼寺址」のそれは限られた小破片で内区文様が不明であるため比較することは困難である。文様形式からみて、石井廃寺の出土瓦の造瓦の時代と時代差の大きくなる頃にこの瓦窯の使用があったと思われる。陰刻の文様をもつB類軒平瓦の出土地は、今までにまだ知られていない。この瓦窯で焼成された瓦は厳密にいえば県内において未見であるといわざるをえない。その出土を俟ってこの供給先の解明をしたい。

瓦類とともに土器の出土があるが、この土器の中に黒色土器がみられる。黒色土器は、これが県内初見のものである。この黒色土器は、口縁径14.7~16.4センチメートル、器高5.3~6.0センチメート

第6図 円面鏡(浪花勇次郎氏原圖、立花博復写)



ルの法量をもつ5個体の杯である。口経比（内部の深さ×100/口径）は32.0～32.3を示す。内部は漆黒色で幅2ミリメートル程度の笠で横に、しかも順手方向に、6センチメートル程の長さで、丁寧に磨き内面調整をしてある。外縁の口縁付近は黒色を呈し、体部は赤褐色であり、底部には低い付高台のついたものである。底部はへら削り、口縁部は「なで」その他は「笠磨き」によって器面が整形されている。この黒色土器は、畿内では8世紀後半にその初現があり、9世紀から10世紀にかけ盛行したといわれている。<sup>註(4)</sup>この出土の黒色土器は、この形態、成形からみて第1期末～2期のものと思われる。平安初期と考えて大差はないと考えられる。また、これらの土器は、二次的な遺物であるとも考證<sup>(5)</sup>えており、今後の課題としたい。

以上、若干の考察を加えてきたがこの瓦窯における瓦の焼成は、奈良時代に使用され、平安時代初期には、瓦の焼成が廃止されたものと考える。その使用期間中にあたっては、壁面の剥落補修の状態から考え、2～3回ぐらいいの補修が行なわれたものと思われる。

おわりに、厳寒の中での調査であったにもかかわらず、小松島西高校の郷土研究クラブの諸君の献身的な協力と阿部岩蔵氏ご夫妻のあたたかい接遇を深く感謝し、この瓦窯の調査報告とする。

#### （註）

- (1) 徳島県文化財調査報告書第7集「徳島県遺跡目録」
- (2) 吉川弘文館発行「石井」
- (3) 石川重平氏「阿波古瓦の研究」徳島教育
- (4) 日本の考古学、歴史時代上
- (5) 稲垣晋也氏「瓦器焼の成立と展開」日本歴史考古学論叢2

# 徳島県那賀郡上那賀町古屋岩陰遺跡調査概報

立 花 博

## 1. はじめに

昭和40年8月、徳島県博物同好会の会員が主体となり、徳島県博物館が主催して那賀川の上流地域の自然調査を行なった。このとき、上那賀町古屋にある石灰岩の岩陰から石灰華のついた二枚貝（ヤマトシジミ）の貝殻を採集したことを調査員に聞き、ただちに現地におもむき、その岩陰の表面採集をしたところ、条痕文土器片を一片採集することができ、縄文式土器を包含する岩陰遺跡であることの目やすがついた。その後、洞穴遺跡の調査のため高知女子大岡本健児先生が来県されたのを機に現地をみられ、有望な遺跡として「日本の洞穴遺跡」に「那賀郡上那賀町古屋岩陰遺跡」として紹介された。

## 2. 遺跡の位置

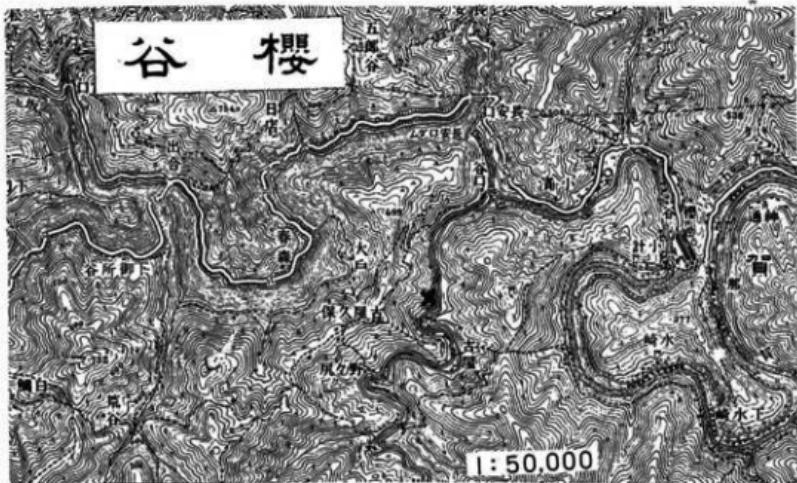
遺跡は、徳島県那賀郡上那賀町古屋字堂見谷3番地の1に位置している岩陰である。

上那賀町は、旧宮浜村と旧平谷村が合併した町で、遺跡は旧宮浜村に属す。ここは源を高知県境に発し、県中央を東流する那賀川の

第1図



第2図 ×：岩陰遺跡

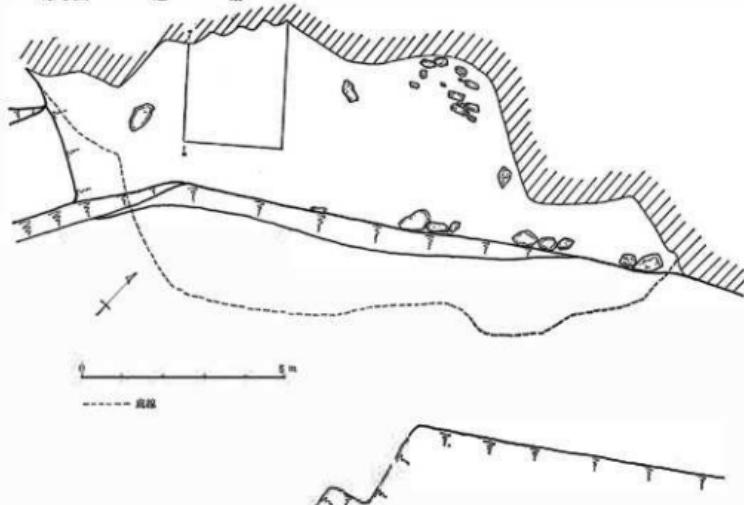


第1図版 岩陰遺跡の石灰岩の露頭



流域の渓谷に開けた集落であり、奥地の木頭村とともに杉の産地として知られている。戰後、開発がすすみ、長安口ダムや発電所が建設されたりして、往時の山間僻地の面影を失いつつある。この川に沿って徳島と高知を結ぶ国道195号線が開通しており、これがこの地域の交通の動脈となっている。これを50キロメートル下らねば、平坦部にできることができない不便さも残っている。古屋はこの町にある長安口ダムの堰堤の下流約4～500メートルのところで合流する古屋川に沿って古屋林道がつ

第5図 遺 跡



けられ、その古屋林道を約1.5キロメートル奥まった所にある小部落である。その林道から約30メートルの高さで、古屋川の渓谷に向って南面する斜面上に石灰岩の大露頭の岩陰が遺跡である。（第1図第2図）（第1図版）

この岩陰は、標高約260メートル、頁岩を母岩とする秩父累帯の春ノ森層と呼ばれる石灰岩地帯でこの近辺には、いくつかの石灰岩の岩陰や洞穴が知られているが遺跡としての確認はされていない。

この岩陰は、ほぼ正南面し東西16.6メートル、岩陰の前にある水田面から底までの高さ約13メートル、底から下した垂線から岩陰壁面までの最大奥行は7.1メートルあり、底内で60平方メートルの広さの床面をもつ岩陰である。岩陰から林道までの斜面には、数段の棚田がつくられている。岩陰前面のテラスは水田となっている。（第3図）（第2図版）

第2図版 古屋岩陰遺跡



### 3. 調査の概況

昭和41年4月3日から6日までの4日間岡本健児、秋山泰両先生の指導と石丸洋（明大学生）岡本坦（早大学生）、新居健介君の協力を得て調査を行なった。

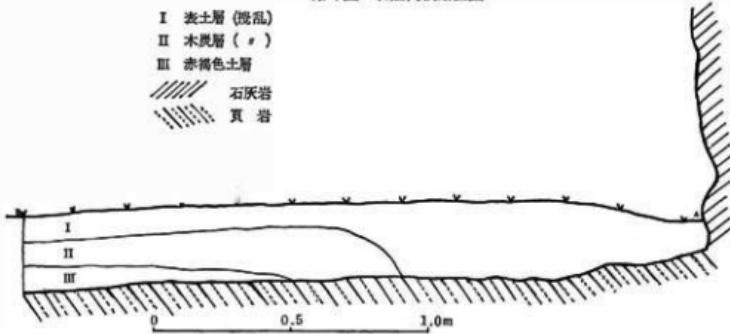
発掘区を岩陰内の西半部に $2.5 \times 2.5$ メートルの壁面に接する正方形の調査区域を設定し、この区域内で表土から剥離を行なっていった。（第3図）（第4図）

第1層は、岩陰内の表土とみなされる層で石灰岩の小石を含んだ灰白色の砂質土壤であり、木炭粉の混入もみられ、搅乱のいちじるしい層であった。この搅乱層から石器、土器片が発見され、またチャートの剥片および自然造物のほとんどがこの層に包含されていた。

第2層は、木炭灰の堆積層である。かって土地所有者が木炭をつくったことがあるところだといわれる所以、この層は、その残滓と思われる。

第3層は、褐色土層でこの層は薄く、岩陰前面の水田につづく層である。

#### 第4圖 岩隙內橫斷面圖



第2層、第3層には、遺物の包含はみられなかった。第3層の下は、頁岩の岩盤となっており、表土下約30センチメートルの位置にある。このように堆積層が薄く、擾乱がいちじるしいために遺物包含層内の遺物の層序は不明で、土器の編年上必要なものを失っていたことは惜しまれることであった。しかし岩盤が傾斜する傾向がみられるので、前面の水田耕作土の下には、遺物包含層があると推定している。

#### 4. 出 土 遺 物

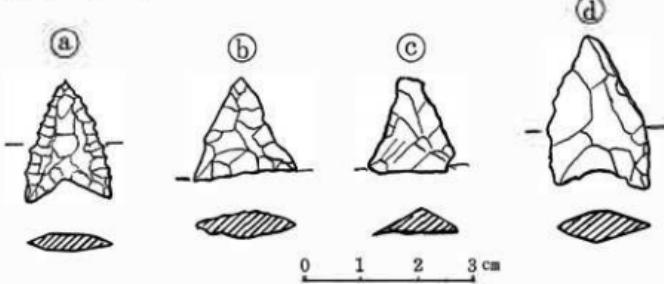
### (1) 自然遺物

攪乱された層には、人骨片、動物骨片、貝類が含まれていた。人骨片には、頭骨の破片、大腿骨の一部など、動物骨片には、ニホンジカの肢骨片、イノシシの下顎骨片、アナグマの上顎骨片、歯、オコジョの下骨片、キジ類の肢骨など、貝類は、カワニナが大部分であった。

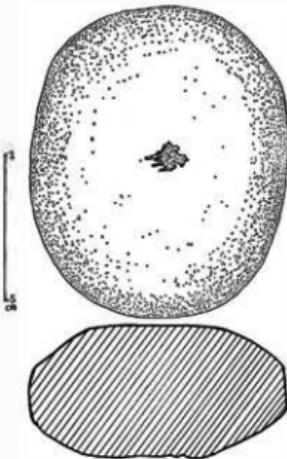
(2) 石 器 (第5図) (第6図)

搅乱層中から石鏡が3点発見されたが、いずれもチャートを使い打製の石鏡である。それぞれの石鏡について述べよう。

### 第5圖 石 錄



第6図 石器



④長さ2.3センチメートル、厚さ0.4センチメートルで  
⑤⑥に比べやや大型である。形は、二等辺三角形を呈し  
基部には八字状のくりこみを施し、刃部には刺のある有  
刺鎌である。両面とも剥離加工をしてあり、断面は柳葉  
状をなし、精巧なつくりの石鎌である。

⑥長さ1.8センチメートル、厚さ0.5センチメートルの  
小型石鎌である。④と同じように二等辺三角形を呈し基  
部にくりこみはない。断面は、菱形を呈し、両面とも剥  
離加工をしたものである。

⑦長さ1.7センチメートル、厚さ0.4センチメートルの  
小型石鎌で、形は二等辺三角形で、基部のくりこみはな  
い。断面は、三角形状で片面は一次剥離であり他面は二  
次的な剥離を施したものである。

その他の石器には、長径11.7センチメートル、短径  
9.0センチメートルの楕円形で厚さ4.5センチメートルの  
砂岩の川原石を利用した敲石と思われるものを1個発見  
した。（第6図）

**(3) 土器**（第3図版）土器は、搅乱層中に包含されていたものであり、いずれも小破片で、  
口縁部、底部と推定されるものではなく胴部と思われるものばかりである。そのうえ数も少なく、同一  
土器の破片と思われるものも1～5片であるため、器形、大きさなどを知るのはきわめて困難である。

土器の器面に施された文様から押捺文、条痕文、無文にわけられ、その胎土、文様からそれぞれ2  
形式に小分類される。

#### <押捺文土器>（第3図版1, 写1）

押捺文の施文された土器片は合計4片あるが、その1つは8ミリメートル内外の厚さをもち、内外  
面ともに赤褐色の胎土に細かい砂粒を含み、焼成堅硬で良好な焼きあがりの土器である。文様は、内  
外面ともに連続したなだらかな山形文を横方向に施文している。山形文の波はその頂点間の長さ8ミ  
リメートルを周期として施文され、山形刻線は2ミリメートル内外の幅をもち約2ミリメートル間隔  
に刻まれたものである。

他の3片の土器片は、6ミリメートル内外の厚さで黒褐色の胎土に1～2ミリメートルの化粧土を  
内外面につけ、胎土には、小さい石英粒を含み、焼成は前述の土器より軟い。外面は、横方向に連続  
した山形文は、振幅がきわめて小さく山形刻線は不明瞭であり、間隔もせまく密である。山形文の波  
の頂点間の距離は1センチメートルの周期で連続している。

#### <条痕文土器>（第3図版3写3）

条痕の施文された土器は3片あり、施文の状態、焼成からみて2つに分けられる。

その1つは、外面は灰褐色、内面は黒褐色で胎土は細かい砂粒を多量に含み、厚さ9ミリメートル

内外で比較的硬い焼きあがりの土器片である。外面には5~6本を単位として綫状に施文された条痕をもつものである。条痕は幅2ミリメートル内外の条が約3ミリメートル間隔で施文されている。内面は不明瞭であるが外面と同じように条痕が施文されている。

他の1つは、外面は赤褐色で1~2ミリメートルの化粧土がつけられ、胎土は黒褐色を呈し、細かい砂粒を含んだものである。約8ミリメートル内外の厚さをもち、比較的堅硬な焼きあがりの土器である。文様は内外面に施され、外面には、2ミリメートル前後の化粧土の上に極めて不明瞭であるが条痕を施文した痕跡が見られる。内面には幅2ミリメートルの条が3ミリメートル間隔に施文され、前記の条痕文の土器片にきわめて類似したものである。

#### <無文土器>（第3図版5写5）

内外面に施文の痕跡のない無文土器片は5片みられるが、焼成度からみて2つに分けられる。その1つは、外面は赤褐色、内面は褐色の化粧土が施され、胎土は黒色で8~9ミリメートルの厚さをもつ土器片である。胎土には比較的大きな砂粒を含み、焼成は良好の土器片である。内外面の化粧土中には、繊維痕と思われるものがみられる。

他の1つは、前記土器片より薄平で厚さは6ミリメートル前後である。内外両面ともに1ミリメートル程度の化粧土をかけ、胎土は黒色で微粒子の砂粒を含み、焼成は軟弱であり、化粧土も脆弱で薄く剥離されやすい。

## 5. おわりに

徳島県内で、縄文式土器を確実に出土した地は

- ① 徳島市城ノ内 城山
- ② 板野郡上板町神宅
- ③ 麻植郡鴨島町西麻植
- ④ 三好郡池田町
- ⑤ " 三加茂町
- ⑥ 阿南市福井町

の数ヶ所にすぎない。このうち③~⑥は吉野川の沿岸にのぞむ山麓、丘陵上に位置し、⑥もまた盆地内に位置する。いずれも平坦地に近い所か、平坦地にのぞむ所にその包含地が知られている。しかし古星岩陰遺跡は、前述の如く、僻遠の山間地で、その地にも縄文式土器の包含跡が認められたことは、県内の今後の研究、調査にも大きい影響を与えることになるだろうと思われる。

前記の縄文式土器の包含地の土器は、いずれも後~晩期に比定される。沈線文、磨消文がある器面調整法でつくられたものと聞いているが、押捺文、条痕文のある土器は知られてはいなかった。

本県は、縄文式土器の編年がいまだにできておらず、詳しい位置づけはできないが、四国の縄文式土器からみて、これらの土器は、不動岩屋遺跡、佐川、城ノ合遺跡に相当する縄文早期後半のものでなかろうかと思われる。

最後に、発掘調査にご指導いただいた岡本、秋山両先生をはじめ、岡本君、石丸君、新居君ならびにいろいろ便宜をはかっていただいた地元の方々がた、さらに上那賀町白石の白石小学校校庭で石獅1個(第5図d)を採集されご報告いただいた同校長吉見哲夫先生にも深く謝意をあらわし報告とする。

第3回版 土 器(拓影)



図. 1



図. 2

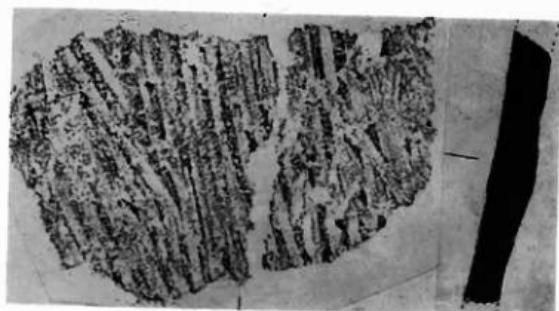


図. 3



図. 4



図. 5

第3圖版 土 器(写真)



写. 1 (外面)



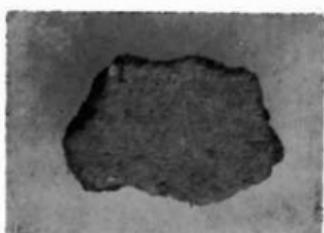
写. 1 (内面)



写. 2 (外面)



写. 3 (上・外面) (下・内面)



写. 4



写. 5 (外面)



写. 5 (内面)





